

# 農村青年社を語る

和佐田 芳雄

アナキズム史から無視された農村青年社

農村青年社は、日本アナキズム史から、まったく無視されています。

当時の、「純正アナ」と自称する人々から「異端」扱いをされてきました。

戦後、アナ連が再結成される動きがあり、会場も、広島  
の三原であったので、よびかけにこたえ、僕も行きました。  
そこには、アナキストの大先輩がずらりと参加されて  
いました。

しかし、彼らの議論というのは、かつて我々が批判した  
域をまったく出ていなかったと感じました。

彼らは、戦前のアナキズム運動の反省や、点検総括をす  
る事もなく、戦後、そのままで出発していったのです。

彼らの、「なにを為すべきか」という議論は、堂々めぐ  
りの観があったのです。革命をどう日常的な場面で作っ  
ていくかが依然としてまったく眼中にないのです。

戦前、純正アナキズムは、そうした問題を、議論の余地  
から切り捨てたのです。どこがどう問題で、どうしてい  
くのかという具体性がないままに、暴力的に、「敵」と対  
決していくというやり方を、黒連といわれた人々は、やっ

ていました。

もつとも黒連だけではなく、当時の日本のアナキスト  
の多かれ少なかれはそういう流れでした。

そしてまた、アナキスト間で、論争をするという事が  
保障されていませんでした。

一個の思想人として、討論を深めていくうちに、どちら  
も、啓発されて発展をとげるのに、そうした思想人らしい  
行為が保障されていないという悲しい時代だったのです。

思想集団ではなく、一つの暴力集団になりさがってしま  
っていたわけです。

権力が、侵略戦争へとすすんでいるのに、反体制派のア  
ナキズムの同志達が、少しの違いで敵どうしになって争っ  
ているという悲しむべき現実があったのです。

しかも、前衛的な議論はしていながら、具体的には、なん  
らの闘いもしていなかったのです。

生活の実態は、企業や商店主への、「たかり」めいた行  
為で、刊行物を発行したりしていたというような状況でし  
た。

「たかり」めいた行為も、金銭的にも、微力だった当時  
のアナキストの現状で、いたしかたない側面もあったの  
ですが……。

しかし、そうした無気力で、無反省な生活の中からは、

具体的な革命への意欲が湧いてくるはずがないのです。

そういう時代の中で、「農民に訴う」は、衝動的な出現だったのです。

当時の「モサ」といわれた論客達には、目のかたぎにされました。

とりわけ、黒連の上田彰などからは、痛烈な罵と暴力的実力行使の宣言がされました。

革命といえば、「天皇の暗殺」、つまり、テロリズムによって、現体制を打倒できるような考え方が強かったので、

具体的、現実的な「農民に訴う」などは、まったく、「革命」の論議の中には入らないと思われていたのでした。

つまり、当時のアナキスト達は、天皇制の打倒や廃止というのを口に出していません。

むしろ、文字にすれば、「不敬罪」になるので、活字の上には公けに登るといふ事はなかったのですが、仲間どうしでは、公然とそういう言葉を吐いていました。

当時のアナキストの、革命の回路は、天皇をテロして、権力機関を打倒することによる革命の道はあっても、現実

の生活の場から登りつめていくという回路が、まったくなかったといつても過言ではありません。

現実の具体性のあるプログラムとして、革命をつき出したこと、又、政治権力の解体という闘争を、日常の闘争へと拡大していったこと、つまり、経済構造そのものを問題

にしていったことで、農青の出現は、画期的だったのです。

### 農村青年社と黒色青年連盟

農青の同志は、黒連をはじめとした当時のアナキストの不当な批判に対しては、見解はもっていました。

彼らが、我々に近寄るのなら別だが、我々の方から彼らに近寄るといふ意志はまったくありませんでした。

僕らは、「黒連は解散せよ」などとは、言葉では言っていました。が、実際に彼らをどうしようという様な気はありませんでした。

それほど、当時のアナキストの主流は、黒連側が圧倒的多数を占めていたのです。

黒連は、黒連なりの活動をやっているのだから、彼らなりにやればよい。しかし、我々まで、同じ地平を歩けと言われれば、それは絶対に出来ないという立場をとっていました。

接点のない黒連という組織との机上の論議を避け、我々は、農青の活動を集中してすすめていきました。

当時、アナキスト間でも、東京は、なんとなく中心で、各地方は、それにならえというような雰囲気がありました。

こうした雰囲気とは、いいかえれば、アナキストの間で、意識的ではないにしろ、無意識のところ、集中管理主義めいたものがあつたとも言えるのかもしれない。

その中で、農青だけは、各地方を拠点として、本部とか支部などという考え方をしなかったのです。

組織そのものが自由でフランクなものでした。

当時の黒連とは、天皇制打倒と、アナキズム革命の遂行という理論の接点があつたとしても、それをいかに成就させていくのかというプロセスの点で、決定的な違いがあつたのです。

彼らのサロンの議論や、又、我々に対する無内容な批判には、なんら有益なものはないし、我々には、彼らに対する反論は、きちんと確立されていきました。

しかし、悲しいかな、黒連は、農村青年社を、「スパイ」とか、「異端」といふ形で、打倒する対象とする事で、自分達の組織の正当性を打ち出そうとする事に、その活動の多くをかついていたのです。

農青がまったく反撃をしなかったと、誤った認識のしか

たをされている人々がいるようですが、事實は違っているのです。  
接点も地平もまったく異なる者との不毛な、そして、無内容なやりとりをしない事を、農村青年社は選択したので

### 農村青年社にいたるまでの歩み

僕の農青までの歩みについて、若干触れておきましょう。僕が、生を受けたのは、広島市の東の端、尾長町という被差別部落でした。

僕は、16才から17才まで靴の徒弟として職人の見習い仕事をしていました。

そして、靴職人となった僕は、島根県大原郡木次という所で仕事をしていました。

僕が17才の時、広島時代から一緒に活動していた中本愛光から、大阪に来ないかという手紙が来たんです。

そして、突然、倉元光次郎という人が、僕をたずねて、一緒に大阪へ行こうとオルグをさかんにかけてきました。

そこで、僕も大阪に彼らと共に行く決意をしたんです。そして、当時、大阪住吉区の松虫花壇という園芸場近くの

中本愛光君の所をたずねていき、しばらく共同（無首領社）生活をしていました。

そこで、大串孝之助君や、関西アナと交わりを持つようになったのです。

この頃、ちょうど、僕は、体を悪くしました。忘れもせません。海水浴をして、こおら干しをしていたら、急に気分が悪くなり、起きあがったところ、吐血して

病院に運びこまれたのです。病名は肺結核で、その後、和歌山の野上結核療養所へ、

安田力さんの前夫、野口君の紹介で、入院しました。約一

年近く、そこで療養生活をしていました。

その後は、またアナ活動に復帰し、関西アナキスト青年連盟で活動しました。当時の仲間では、季ネストル、大串孝之助、山岡喜一郎、彼の弟の山岡英二、上野克己、田原康夫、平井貞二らがいました。

僕が特に親しかったのは、山岡英二君でした。

彼は、僕と年齢が近かったし、僕と一緒に東京に行こうとまで約束していたにもかかわらず、僕ひとりが東京に行ったという形になったので、なおの事、親睦の度合は深かったのです。

関西アナで活動中、僕は、全国水平社大会が名古屋で開催されると聞き、そのついでに、あの天皇に直訴をした北原泰作君と会ったりもしました。

彼とは、本当は、大阪で会えると思ったのですが、警察権力の介入で会えなかったのです。

北原泰作君が岐阜に帰る途中、大阪を通るので、僕等は、荊冠旗をもって、ホームに迎えに行っただけです。しかし、警察が僕等を検束し、北原君に会うのを妨害してしまいました。

そこで、大串、山岡喜一郎と、僕の三人が北原君の生家まで、後に訪ねていったのです。

全国水平社解放連盟が、あまり活発でなかったため、その事について、北原君と話合いました。

山岡君と僕は水平社解放連盟の同志でもありました。僕は、大阪でのアナキスト青年連盟で活動中、「農民に訴う」に出会い、その総括も含めて東京に行ったのです。

大阪でのアナキスト青年連盟は、「農民に訴う」を受けて、現在、自分達がしているような闘いではないかというものと、いや、「農民に訴う」には反対だというような両派に分裂してしまっただけです。

そこでは、激論がされ、アナキズム革命の本質的な議論

がされました。

そして、結果的には、大阪のアナキスト青年連盟は解散したんです。

僕は、「農民に訴う」をみて、農青に共感し、なんとしても自分も同志として闘おうと思ひ、東京の農青の事務所を訪ねる決意をしたのです。

その頃は、芝原君たちのグループと一緒に行動をしていました。

芝原君の紹介で、僕は、田頭正治君の所へ一ヶ月ばかり居候生活をしていました。

僕が22〜3才頃、農村青年社の事務所、東京下目黒九三〇番地の事務所へ、一人訪ねていきました。

その時、鈴木靖之君に出会いました。

僕は、鈴木君と一緒に、農青の事務所に戻り、八木、平松、田代、星野、宮崎君らと運動を通じて知り合いました。

そこでの僕の主な仕事といえば、事務整理や連絡の手伝いなどでした。

また、当時、「略(りやく)」と呼ばれていた行為にも、たまには参加しました。

社会主義活動家は、その活動資金があまりに乏しかったので、資金かせぎの為に、「略」をしていたので。

例えば、「夜襲」と呼ばれる、大きな金持ちの屋敷で活動資金を得る等の非合法活動にも参加した人もいました。

また、文士に、資金的に困っているから、刊行物出版の為に援助してくれないかと言ってカンパ等をもらいに行ったりもしていました。

武者小路や島崎藤村なども、よく金を出してくれていたようです。

それに、寺院の僧侶からも、よく金を引き出させていたようです。

しかし、僕や、農青活動家は、運動資金の為とはいえ、こんな生活をしていて本当に革命への意欲が湧くだろうか、常に疑問を抱いていました。

僕が、今でも、運動資金についてよく気にかけるのは、財源の確立をきちんとしていなければ、いつしか虚しい資金集めの活動に終始してしまい、本来の活動への意欲を減少させるということ、この頃からよく思い知らされたかなのです。

僕は、農青の事務所では、農青イズムというよりは、むしろ、鈴木イズムとでもいうか、彼の思想に影響されていました。

目黒あたりには色々なアナキストのグループがありました。

小野長五郎なども近くに住んでいましたし、「貧乏人根絶論」を書いた吉田ただしなどもいましたね。

そうした多くのアナキストの中で、僕は、「農民に訴う」に賛同するもの、批判的なものを選別し、自分の交流を選んできました。

農青では、雑誌の発行者名や振替の代表者などというような合法部分を鈴木君がやり、後のメンバーは、非合法部分を受け持っていました。

合法部分を鈴木君が受け持っていた関係上、特高からは、鈴木君がマークされていました。

しかし、権力は、うすうすではあるけれども、非合法部分をやっていった人間の見当はつけていて、下目黒の事務所に入入りする者は、みんなチェックされていたようでした。

### 社会運動に対する絶望と挫折とその帰納

僕は、被差別部落民という出生から、水平社運動という闘いをしてきました。

そして、その闘いをおして、社会主義運動にめざめ、アナキズム運動を闘いました。

しかし、水平運動も、数々の社会主義運動も、僕に希望をつなげてくれるものは少なかったと思います。

そして、僕は、いくつかの絶望感、挫折感を経て、それを帰納するものとして、農青にゆきついたのであります。

水平運動については、天皇制についての考え方に疑問をもちましたし、また、現実の闘いの中で、絶望してしまいました。

天皇制、天皇を利用しての差別糾弾闘争に対して、僕は、どうしても納得することができなかったのです。

「解放令」をたてにとり、部落差別をする者を、明治大帝の御聖旨にそむくとして、糾弾するのは、天皇制を認めることになっていきます。

天皇を射程に入れないで、どうして差別問題を語れましょうか？

また、部落の中でも、天皇を批判しようものなら、目のカタキにされました。

僕は、後に、青同派と、解放連盟という分裂の中で、全水解放連盟という、アナ系の組織を選択し、水平運動を闘ったのですが、しかし、この組織として、まったくはつきりしない形で自主解散をしてしまいました。

自主解放する理由や、これまでの自分達の運動の総括を放棄し、運動の戦線からカンバンをとりはずす事に、僕は、言いようもない挫折感を味わいました。

全国水平者創立の時点、平野小剣、坂本清一郎、西光万吉などは、アナキズムの影響を受けていて、水平社宣言は、それがなかったら生まれなかったと言っても過言ではなかったのです。

しかし、次々と活動家達はボルに流れ、また、北原君をはじめ、アナ系の人々も、ボルに転向してしまうという現

実を見る中で、僕は、水平運動に対する限界性を見て、アナキズム運動へ走ったわけです。

しかし、日本のアナの状況も、革命とは、テロの反復によつて、権力を打倒し、成就できるという甘い考えをもつていた者達が多く、経済構造の変革一すなわち、人民生活

の中に於いて、共産の構造を確立し、資本の搾取からの解放と、資本主義構造を根幹から打倒するという具体的なプロセスを実現しようとする内容が欠落していたのが、当時の多くのアナキストの現状でした。

本来の意味で、支配—被支配の構造を断ち、人間が一個の「個」として、自由に生きるといふ社会建設とはほど遠い、具体的な道すじのない「観念的な議論」が横行する現実の中で、僕は、やっぱり、アナの運動にも少なからぬ絶望を持っていました。

そこでの「農民に訴う」とのめぐり合いは、僕にとっては、第二の思想的開眼ともいふべきものでした。

当時の日本のアナキズム運動に、自分が身をよせるところはないと思っていた僕には、この、「農民に訴う」という思想以外に、僕の基盤をおくところはないという思いでした。

おおげさに言えば、ここしか自分に生きる道はないという感じだったのであります。

僕は、水平運動と、当時のアナキズム運動という二つの闘争の渦中で、絶望の中から、それを帰納しようと思ひ続けてきました。

自分が、積極的に、かつ、自分自身の思想の良心を持ち続け、それに対し責任をとりきれられるような運動を求めて活動を続けてきました。

そして、僕は、その展望を、農青の中に見てきたのです。もちろん、農青の活動について全面的にプラスの評価を下すという事は、ありえるはずはありません。

しかし、次々と活動家達はボルに流れ、また、北原君をはじめ、アナ系の人々も、ボルに転向してしまうという現

実を見る中で、僕は、水平運動に対する限界性を見て、アナキズム運動へ走ったわけです。

しかし、日本のアナの状況も、革命とは、テロの反復によつて、権力を打倒し、成就できるという甘い考えをもつていた者達が多く、経済構造の変革一すなわち、人民生活の中に於いて、共産の構造を確立し、資本の搾取からの解放と、資本主義構造を根幹から打倒するという具体的なプロセスを実現しようとする内容が欠落していたのが、当時の多くのアナキストの現状でした。

当然、欠落点や、問題性、限界性は含んでいました。

しかし、1930年代の闇の時代の中で、農青の思想からの出発は、必ずや日本のアナキズム運動の地平を切りひらくものがあると、僕は確信していましたし、今も、その確信をまちがっていないと思います。

拠点主義は、その拠点を打ちのめされると、まったく身動きがとれなくなりませう。

しかし、農青は、たとえ、長野で大量検挙が始まって、全国で農青イズムで闘い続ける同志をきちんともっていません。それは自主分散の組織の特有な闘い方だからです。

略によって、刊行物を出版したり、都会のアナキスト仲間だけでサロンの顔をつき合わせて革命を語ったところで、いったい、そうした生活が本当に僕らの目ざす革命に、どのように結びつくというのでしょうか。

農青は、その思想と行動によって、農村という生活圏を自由コミュニケーションとし、そして、革命的地理区画をつくり出し、人々の思想と生活を変革していったのです。そして、それを、僕らは全村運動と呼び、各地でその胎動があったのです。僕は、思想の良心に従うとは、我が身の生活のあり方から、問題になってくると考えています。

また、アナキズムとは、文字どおり、その事を問題にし、支配一被支配の構造をいっさい廃絶し、人格という、ひとつの「個」としての人間の活動を自由に展開できる社会建設をめざす革命行動だと確信しています。

「農民に訴う」は、日本革命のひとつのテーゼであるといつても無理はないと考えています。

### 現在の農青評価にみる日本の状況

僕は、現在の農青評価が、日本の状況を適切に体现していると思います。

農青の評価をながめると、現段階の日本のアナの状況や、日本革命運動の状況の一端が明確に見えてきます。

僕は、農青について、正直に言って、今の活動家は、当時と同じように、まったく無理解なままにいると思います。つまり、かつて、僕らが批判してきた運動を、五十歩、百歩同じレベルで展開している諸君達には、「農青は、わからないだろう」と思っています。

現実の状況は、あの一九三〇年代とほとんど内容的には変わっていません。

戦前の「アナルコサジカリズム」に対する評価や、組織論の問題を未解決にしたまま、戦後また、農青が批判した内容を持ちこして、運動をしようとしているように思います。かつて、アナルコサンジカリズムに対する誤った評価で、自ら、具体的労働組合運動や、農民組合運動から、活動の場を放棄してしまった黒連のように、日常的な民衆の闘争を放棄し、大衆から離れ、革命観念を机上で語るサロンアナもいます。

しかし、そんな活動の中では、民衆との連帯も、あるいは、革命の展望も見い出せないと僕は思っています。

さらに、権力さえ変われば、日本の政治構造や体制が変わるんだというイメージをいまだ持ち続けている人もなおいます。

サロンアナや、権力の廃絶といながら、いつのまにか、それに代わる権力へと組み込まれていくアナには、革命の展望は、確信できないと、僕は、信じています。

そして、農青の歴史的検証を、ただ単に、過去の遺物として、資料を見るような気分で検証する姿勢の者達もいると思います。

農青活動は、日本のアナキズム運動の流れを根本からゆがせるようなものだったんです。

なぜ、農青活動が出てきたのか、異端と呼ばれ、アナか

らも打倒の対象とされてきた農青とは、いったい、何を突き出させて出現したのかを深く読みとらうとする態度がなければ、本当の農青の姿は見きわめられないだろうと思いません。

そして、かつて、農青が主眼とした、自主自治という思想性は、産業構造が変化した今日であっても、引きつぐべき思想の根本理念であるだろうし、実際の生活の中で、アナキズム活動を生かすという、日常的闘争の姿勢は、断じて、引きつぐべきものだ、僕は思います。

「日常的な活動を放棄して、何が革命だ！」という事を、当時、日本のアナキスト達は、「農民に訴う」でつきつけられたわけです。

この点を、再度、現在を生きる諸君にも考えなおして欲しいと、率直に思います。

農青に対し、「農本主義」だとか、あるいは、当時と現在では、日本の政治、経済状況は違うからできたという批判をする方もいるけれど、それは、一方的な批判であり、農青の打ち出した「アナキズムの基本概念」に対する批判には、なりえないと思います。

そうした一方的批判をもって、農青を評価する人々は、それぞれの考え方があってよいし、また、しかたがないと思えます。

しかし、日本資本主義の構造的な変化、すなわち、一国内での資本主義体制から地球的な構造へとすすんでいった現在では、国際的なアナキズムの連帯運動の必要性がせまられているのにもかかわらず、その事に対して、非常にたおかくれているのも、またひとつの事実です。

そして、その問題ひとつとっても、いかに克服していくのかという視点の欠落が、現在の日本のアナには、つきつけられていると思えます。

いずれにしても、農青の評価についても、様々な積み残

してきた問題についても、なにひとつとして具体的な方向性が出されていないのが、日本のアナの現状です。

僕は、農青に対して、日本のアナキストがきちんとした評価をし、そして、批判すべき点があるなら、きちんと批判をして欲しい。

しかし、残念な事に、今まで、農青の存在そのものさえ知らなかった人や、また、農青の批判を、かつての黒連などと同じ視点で展開している人々しかないと、思い知らされてきました。

僕らの活動に対する、内容的な批判に出会った事は、かつてなかったと、さみしい感じもしています。

これが日本のアナの状況なのでしょうが、その中で、僕は、僕らの農青活動の正しかった確信を持つと同時に、時代は移りかわっているというのに、戦前、戦後をとおして、日本のアナをめぐる状況が何ら、新しい地平をきりひらいていない事を、悲しく思います。

一個の人格を持った人間として生きるということ

革命を遂行しようとする考え方や活動は多様であるし、アナキストと呼ばれる人々の中でも、色々な思想をもった人がいます。

それは、当然な事です。僕は、それを認めています。しかし、アナキズムというのは、一人間が人間として生きる「エゴ」の確立のない人間の行動は無意味であるという事だと思えます。

個人としても、集団としても、それは可能でなければならぬし、そうしたなかで、共同や連帯が生まれてくるものだと思います。

この点については、AとB、この点についてはAとC、BとCが、共に闘うというような形で、自由に闘いが展開

されるものだと思います。

そういう視点にたつとき、日本のアナキズム運動は、農青の運動を基盤としなければならぬと、僕は、決して言いません。

エゴの確立した人間が、それぞれ、自由で大胆な発想で結合し、考え、闘えばよいのです。

「〇〇でなければならぬ」などということはありえないのです。

しかし、僕は、僕なりの、当時の黒連に対する批判は持っているし、現在の日本のアナにも批判を持っています。

そして、僕自身の選択で、農青に身を投じたのです。だれも他の活動に批判をしてはならないとも言わないし、

又、そんな事はありえない事なので、批判を持ってよいと思います。

ただ、その為には、本当に、農青なら農青、黒連なら黒連が、いったい何を考え、何を行動してきたかを、みきわめなければならぬと思います。

僕が再三にわたって、「しかたがない」とか、「農青がわからないだろう」といつているのは、ただ否定的な意味で言っているわけではありません。

あくまでも、互いに批判しあったり、連帯しあったりする行為は当然であるといういいかえであり、又、日本のアナの現状をみる中で、農青に対しては、正しい評価を得ることは困難なことだろうという思いを含めて言っているわけです。

僕は、農青でなければならぬと言わないかわりに、また、僕の確信した内容を、一方的な無意味な批判で否定されることも許さないという感覚を持っています。

革命運動を、日常の生活の中で、実現していくという意欲や展望を持たない者達や、あるいは、農青の活動に対し、農本主義だと無内容な批判を下す連中の批判は、断じて受

ける事を拒否したいと思っています。

そして、戦前、戦後のアナキズム運動に対し、僕は、僕なりの総括をきちんとしたうえで、再度、農青の根本理念を、革命思想として、持ちつづけていきたいと思っていますし、現在のアナの人にも、そのような姿勢を持って欲しいと思います。

僕らはいったい何を目ざしているのでしょうか？  
机上の空論の組みかえではないはずで、

イージーな権力奪取による体制の変革でもないはずで、そして、現実の生活とかけ離れ、日常闘争を放棄したサロンで、アナキズム革命を語りあかすというものでもないはずで、

僕たちが、今、一個の人格として生きるということ、その事を実現する為の社会を建設していくという活動そのものであると思います。

僕らの思想の良心は、深く考えた思想を実現する為に、自分の暮しの中を変えきることにあると思います。

そして、その地平を突き出したものが、農青であったと僕は信じているし、そして、長野の、一村丸ごとが、農青活動を展開しきつたのだという過去の事実が示すように、農青イズムの活動は、生活スタイルそのものを変革しうる突破口であると確信しています。

僕は、農青の「農民に訴う」を、ひとつの革命テーゼと  
思っているし、そして、それがかつてのアナの限界性をき  
びしく批判し、指摘してきたように、現在のアナのそれ  
も痛烈に批判しぬいているような気がします。